

## 中世ポルトガルの聖マリア信仰と文芸 (下)

— 旅の愁いのカンティーガ —

Fé e belas letras da Santa Maria nas cantigas medievas gelego-portuguesas, II  
As cantigas para louvar a Nossa Senhora

菊地章太\*  
KIKUCHI Noritaka

### 要旨

本稿は12世紀末から14世紀中頃までイベリア半島の西側、現在はスペインのガリシア地方とポルトガルに分かれた地域で、ほぼ150年のあいだに制作されたガリシア=ポルトガル語による世俗の詩歌カンティーガについて、そのいくつかを読み解きながら、そこに現れた中世イベリア辺境の聖マリア信仰のありようを探る試みである。構成は以下のとおりである。第1章 トロバドールの芸術 1. 詩歌の言語 2. ジャンルの多様さ 3. 『カンシオネイロ』の写本と音楽 / 第2章 愛のささやきのカンティーガ 1. ジョアン・アイラス・デ・サンティアゴ「クレセントの森の小道へ」 2. パイオ・ソアレス・デ・タヴェイロス「何より望んだことなのに」 3. ルイ・ケイマード「身に起きたことを話しましょう」 4. アイラス・ヌーネス「娘よ、今日は踊りなさい」 / 第3章 愛の哀しみのカンティーガ 1. フェルナン・ロドリグス・デ・カリエイロス「愛する人は私に告げた」 2. ペロ・デ・ヴェル「あの日あなたにつれなくした」 3. ペロ・デ・ヴェル「聖マリアのもとに愛する人を」 4. サンシュ・サンシエス「愛する人はきともう」 5. ジョアン・ヴァスクス・デ・タラヴェイラ「あなたが会った私の恋人は」 6. ジョアン・ソアレス・コエリヨ「どんな喜びがあるというのか」(以上前号) / 第4章 旅の愁いのカンティーガ 1. アフォンス・ロペス・デ・バイアン「今日、心踊らせて望むのは」 2. アフォンス・ロペス・デ・バイアン「とてもうれしい知らせが」 3. アイラス・パイス「レサの聖マリアのもとへ」 4. アイラス・パイス「愛する人に会うために」 5. フェルナン・ド・ラゴ「ラゴの聖マリアに」 / 第5章 聖母を慕うカンティーガ 1. アフォンス・メンデス・デ・ベステイロス「世の婦人の中で」 2. デニス1世「ああ、うるわしい御婦人よ」 3. デニス1世「プロヴァンスの手法にならい」 4. デニス1世「さびしかったあの日に」 5. ペロ・ダ・ポンテ「主なる神、今あなたは」 / 第6章 中世ポルトガルの聖マリア信仰 1. 世俗のカンティーガ 2. 信仰のカンティーガ

キーワード：カンティーガ ガリシア=ポルトガル語 聖マリア信仰 中世ヨーロッパ文学

---

\*東洋大学ライフデザイン学部健康スポーツ学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design  
連絡先：〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1

## 第4章 旅の愁いのカンティエーガ

### 1. アフォンス・ロペス・デ・バイアン 「今日、心躍らせて望むのは」

- |    |                                       |                       |
|----|---------------------------------------|-----------------------|
| 1  | Ir quer' hoj' eu, fremosa de coração, | 今日、心躍らせて望むのは          |
| 2  | por fazer romaria e oraçom            | 巡礼に旅立ち、そして祈ること。       |
| 3  | a Santa Maria das Leiras,             | レイラの聖マリア [の聖地] へ。     |
| 4  | pois [o] meu amigo i vem.             | 愛する人もそこに行くのだから。       |
|    |                                       |                       |
| 5  | Des que s[e ele] foi nunca vi prazer, | あの人がいたならうれしかったはず。     |
| 6  | e quer' hoj' ir, fremosa polo veer,   | あの人に会いに今日も心躍らせて行きたい。  |
| 7  | a Santa Maria das Leiras,             | レイラの聖マリア [の聖地] へ。     |
| 8  | pois [o] meu amigo i vem.             | 愛する人もそこに行くのだから。       |
|    |                                       |                       |
| 9  | Nunca serei [eu] leda, se o nom vir,  | あの人が来なくともいつか喜ぶ日が      |
| 10 | e por esto fremosa quer' ora ir       | あるだろう。だから今、心躍らせて行きたい。 |
| 11 | a Santa Maria das Leiras,             | レイラの聖マリア [の聖地] へ。     |
| 12 | pois [o] meu amigo i vem.             | 愛する人もそこに行くのだから。       |

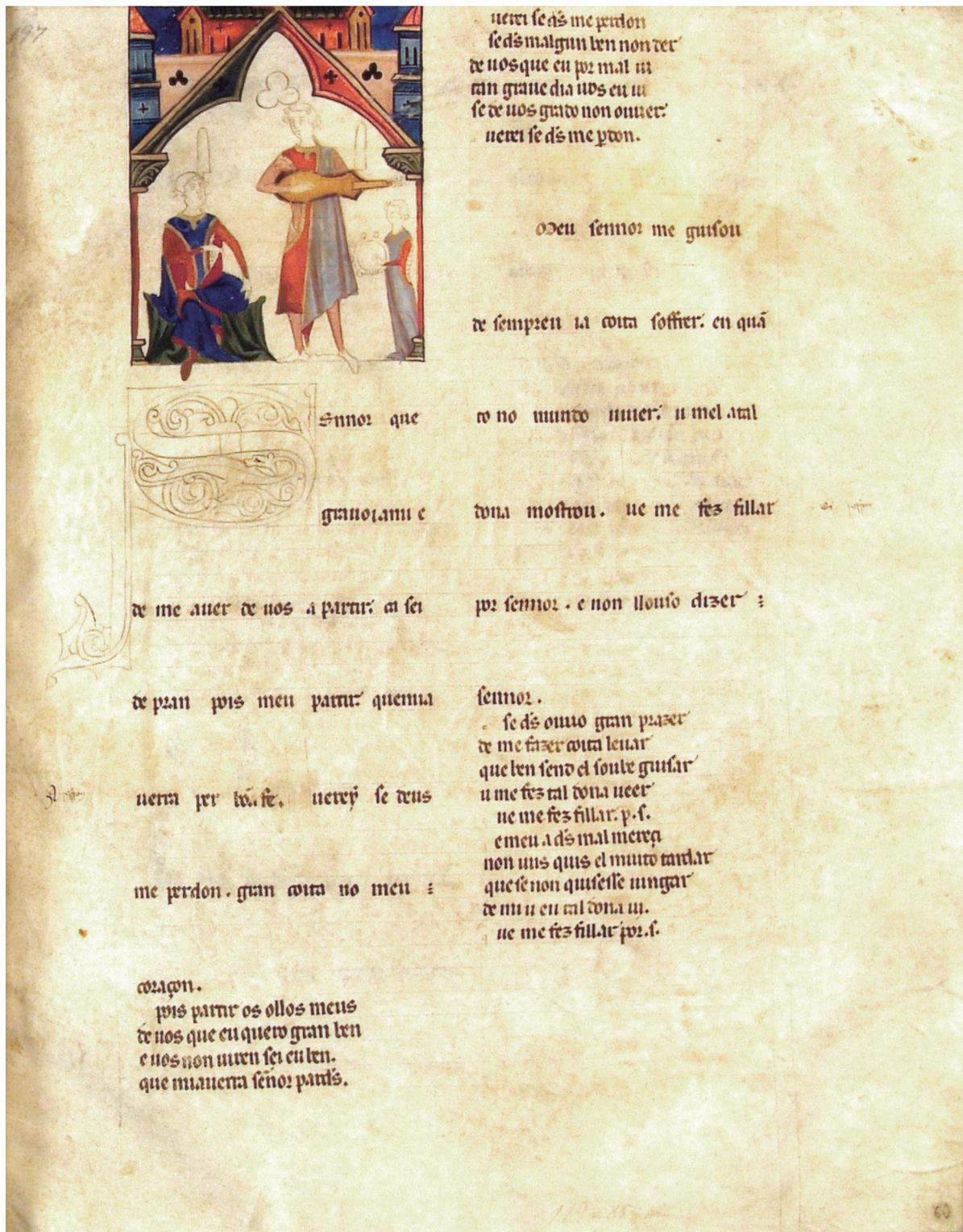
アジュダ写本、欠如。リスボン写本、739番、160葉裏1～2列。ヴァチカン写本、341番、55葉表2列～裏1列。Monaci, pp.133sq.; Braga, p.65; Videira Lopes, I, p.49.

(1) ir /lis. va. mo. br. hyr; quer' hoj' eu /lis. va. mo. queroieu, br. quer' oj' eu (3) santa /lis. va. mo. br. sancta [7, 11行も同様] (4) pois [o] /lis. va. mo. br. poys; i /lis. va. mo. br. hy [8, 12行も同様] (5) s [e ele] /lis. va. mo. sso meu amigo, br. s' o meu amigo (6) hoj' ir /lis. va. mo. ogir, br. oj' ir (8) pois [o] /lis. va. mo. poys [以下欠] (9) serei [eu] /lis. va. mo. br. serey; se o /lis. va. mo. seo (10) quer' ora ir /lis. quer ora hir, va. mo. ancora hir, br. and' or' a hir (12) pois [o] meu /lis. va. mo. poys meu [以下欠]

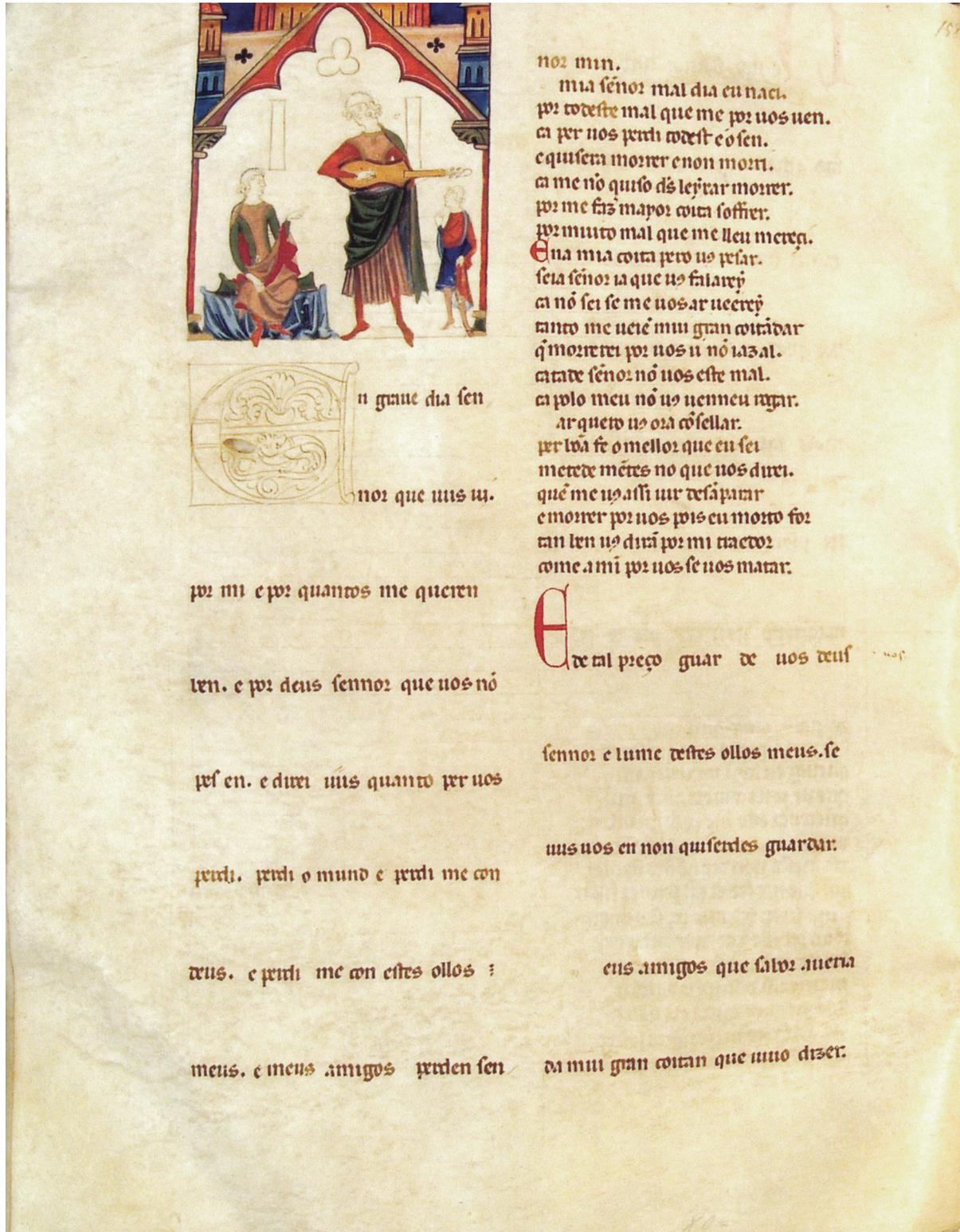
12行3詩節のカンティエーガ・デ・アミーゴ。リフレインをともなう。脚韻の形式は各詩節 aabc である。1詩行10音節（リフレインは8音節）だが、リスボン写本とヴァチカン写本は5行目が「Des que sso meu amigo foy nunca vi prazer」とあって音節数が超過している。ヴィデイラ・ロペスは「Des que s[e ele] foi nunca vi prazer」に改めた。写本の文字を変更すべきではないが、内容に齟齬は生じない。後者にしたがう。

いなくなった恋人をなつかしみ、ふたりの思い出が刻まれた巡礼の町でいつかまた会えることを夢見ている。その日はもう来ないかもしれない。それでもけなげに巡礼の町へ旅立っていく。

ここに歌われた聖地サンタ・マリア・ダス・レイラス Santa Maria das Leiras はポルトガル北部の町ヴィアナ・ド・カステル Viana do Castelo にある。リマ川の河口の古い町で、8月20日のロマリア祭 romaria にはポルトガル全土からこの町のノッサ・セニョーラ・ダ・アゴニア Nossa Senhora



[図1] アジュダ図書館カンシオネイロ写本、60葉表  
 (<https://cantigas.fcsh.unl.pt/cancioneiroajuda.asp>)



[図2] アジュダ図書館カンシオネイロ写本、40葉裏  
 (https://cantigas.fcsh.unl.pt/cancioneiroajuda.asp)

d'Agonia 教会に巡礼がおとずれた。嘆きの聖母 Nossa Senhora das Dores の像がそこにまつてある。この巡礼祭は今もさかんにおこなわれている。マリアの聖地は『聖母マリア讃歌集』におびただしいほど登場するが、世俗のカンティーガにはそれほど多くない。どこもみな恋人とともにいた遠い幸せな日々につながっている。

アフォンス・ロペス・デ・バイアン Afonso Lopes de Baião はポルトガル出身のトロバドール。13世紀の『古系図書』*Livro velho de linhagens* に記された大貴族 *rico-homem* の家系に属する<sup>(1)</sup>。一時期アンダルシアに滞在し、1248年のセビーリャ攻略に参戦した。征服地の分配名簿 *repartimiento* に名が記されたという。これはレコンキスタによって獲得した土地を入植者に分与した制度である。この年に即位した第5代ポルトガル王アフォンス3世の宮廷に迎えられた。1254年以降は由緒あるブラガンサ Bragança の上官代理 *tenente* をつとめ、国王顧問として第6代ディニス1世の治世にまでおよんだ。妻モール・ゴンサルヴェス・デ・ソウザ Mor Gonçalves de Sousa はトロバドールとして知られるガルシア・メンデス・デ・エイショ Garcia Mendes de Eixo の姪である。バイアンの没年は1284年とされる<sup>(2)</sup>。

現在まで伝わる作品は、カンティーガ・デ・アモール2篇、カンティーガ・デ・アミーゴ4篇、揶揄悪口のカンティーガ4篇、あわせて10篇である。

アジュダ写本のうちバイアンのカンティーガを掲載した箇所には挿画がある [図1]。ここに描かれているのは自作の詩を披露するトロバドールか。あるいは脇にすわる人の求めに応じて演奏するジョグラールか。指で弦をつまびくヴィオラ・デ・マン *viola de mão* (カスティールヤのビウエラ・デ・マーノ *vihuela de mano*) を手にする。タンバリンを打つ小姓の姿もある。本稿第3章で取りあげたジョアン・ソアレス・コエリョのカンティーガのところにもこれに類似する挿画がある [図2]。

## 2. アフォンス・ロペス・デ・バイアン「とてもうれしい知らせが」

- 1 Disserom-mi ùas novas de que m' é mui gram bem,
- 2 ca chegou meu amiguo e se el ali vem,
- 3 a Santa Maria das Leiras irei velida,
- 4 se i vem meu amigo.

とてもうれしい知らせが私のもとに届いた。

愛する人が到着し、そこに来るといふ。

着飾ってレイラの聖マリアのもとに行こう。

愛する人がそこに来るのだから。

- 5 Disserom-m' ùas novas de que hei gram sabor,
- 6 ca chegou meu amigo, e se el ali for,
- 7 a Santa Maria das Leiras irei velida,
- 8 se i vem meu amigo.

ずっと待っていた知らせが私のもとに届いた。

愛する人が到着し、もうそこにいるという。  
着飾ってレイラの聖マリアのもとに行こう。  
愛する人がそこに来るのだから。

- 9 *Disserom-m' ũas novas de que hei gram prazer,*  
10 *ca chegou meu amigo, mais eu polo veer,*  
11 *a Santa Maria das Leiras irei velida,*  
12 *se i vem meu amigo.*

大きなよろこびとなる知らせが私のもとに届いた。  
愛する人が到着し、そのうえ彼に会えるという。  
着飾ってレイラの聖マリアのもとに行こう。  
愛する人がそこに来るのだから。

- 13 *Nunca com taes novas tam leda foi molher,*  
14 *com' eu sōo com estas, e se [el] i veer,*  
15 *a Santa Maria das Leiras irei velida,*  
16 *se i vem meu amigo.*

そこで彼に会えるならそれ以上のうれしい知らせはない。  
あなたがそうであるように私もそうなのだから。  
着飾ってレイラの聖マリアのもとに行こう。  
愛する人がそこに来るのだから。

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、739番、160葉裏2列～161葉表1列。ヴァチカン写本、342番、55葉裏2列。Monaci, p.134 ; Braga, p.65 ; Videira Lopes, I, pp.49sq.

(1) *disserom-mi* /lis. va. mo. *diseronmi*, br. *disseron-m'* ; *ũas* /lis. va. mo. *hunhas*, br. *unhas* [5, 9行も同様] ; *que m'* e /lis. va. mo. *queme* (2) *amigo* /lis. va. mo. *amigue*, br. *amigu'* (3) *santa* /va. mo. br. *sancta* (3) *irei* /lis. va. mo. br. *hirey* (4) *se* /lis. sse ; *i* /lis. va. mo. br. *hy* [8, 12, 16行も同様] (5) *disserom* o. *disson* *muhas* ; *hei* /lis. va. mo. br. *ei* [9行も同様] (10) *polo* /br. *pol-o* (14) *com' eu* /lis. va. mo. *comeu* ; *sōo* /va. mo. br. *solo* ; *se* /lis. va. sse ; *i* /lis. va. mo. *hi*, br. *hy* ; *veer* /lis. va. mo. *ueher* (15) *a santa maria* /lis. va. mo. *a scã m̃* [以下欠]

16行4詩節のカンティーガ・デ・アミーゴ。リフレインをとまなう。脚韻の形式は各詩節 aabc である。対になった詩行で類似の内容を語りつつ末尾だけ変えている。これはリスボン写本冒頭の「詩作の技術」Arte de trovar に記された並行体の詩法ドブレ dobre の好例である<sup>(3)</sup>。

思いがかなって恋人がもどってくるという知らせを受け取った。はやる心でサンタ・マリア・ダス・レイラスに旅立とうとしている。「着飾って」という言葉に高揚する心があらわれている。リスボン写本もヴァチカン写本とともに先ほどのカンティーガにつづけて書写されており、ひとつの物語として読むことができるだろう。

### 3. アイラス・パイイス「レサの聖マリアのもとへ」

1	Quer' ir a Santa Maria e,	聖マリアのもとへ行きましょう。
2	irmana, treides migo,	お姉さん、いっしょに来てください。
3	e verrá o namorado	私の愛する人もきっと来ます。
4	de bom grado falar migo ;	私と楽しく語りあうために。
5	quer' ir a Santa Maria de Reça	レサの聖マリアのもとへ行きましょう。
6	u nom fui há mui gram peça.	しばらく行かなかったのだから。
7	Se alá foss', irmana, bem sei	そこに行けば、お姉さん、
8	que meu amig' i verria,	私の愛する人にきっと会えるはず。
9	por me veer e falar migo,	私と会って語りあうでしょう。
10	ca lho nom vi noutro dia ;	あの日は彼に会えなかったけれど。
11	quer' ir a Santa Maria de Reça	レサの聖マリアのもとへ行きましょう。
12	u nom fui há mui gram peça.	しばらく行かなかったのだから。

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、1285番、270葉裏1列。ヴァチカン写本、891番、140葉表2列。Monaci, p.303 ; Braga, p.167 ; Videira Lopes, I, pp.133sq.

(1) quer' ir /lis. va. mo. quer hyr, br. quer' hyr ; santa /va. mo. br. sancta ; maria /lis. va. mo. maria de reça, br. maria de leça (2) irmana /lis. va. mo. br. irmanas (5) quer' ir /lis. va. mo. quer hir, br. quer' hyr ; santa /lis. va. mo. br. sancta ; reça /br. leça [11行も同様] (6) u /lis. va. mo. br. hu ; hui há /lis. fui, va. mo. br. hui a ; mui /lis. mays (7) alá /lis. mo. ala, br. a lás ; foss' irmana /lis. fossirmana, mo. fossir mana, br. poss' ir mana (8) amig' i /lis. va. mo. amigui, br. amigu i (9) falar /va. mo. br. por falar (10) ca lho /lis. va. mo. calho, br. va lh' o ; noutro /br. n' outro (11) quer' ir /lis. va. mo. quero hir ; de reça /lis. va. mo. de [以下欠]

12行2詩節のカンティーガ・デ・アミーゴ。リフレインをともなう。リスボン写本とヴァチカン写本はともに各詩節6行とし、モナチ校訂本とブラガ校訂本もこれにしたがうが、それでは脚韻がそろわない。ヴィデイラ・ロペス校訂本は1～2行と3～4行をあわせて各詩節4行とする。その場合の脚韻の形式は aacc bbcc である。音節数は1行15音節となり、1行目は3音節超過する。リスボン写本とヴァチカン写本には «sancta maria de reça» とあるが、ヴィデイラ・ロペスはリフレインに引きずられた誤写とした<sup>(4)</sup>。2行目の «irmana» は両写本とも複数にする。7行目および次のカンティーガではすべて単数である。後者にしたがう。

サンタ・マリア・デ・レサ Santa María de Reça はガリシア南部のオウレンセ Ourense に位置するという<sup>(5)</sup>。ミーニョ川が流れ、ポルトガルと国境を接する地方である。その聖地を以前はときおり訪れていたのだろう。恋人と訪れたこともある思い出の場所だったのか。それがふとしたすれ違いでそれきりになってしまった。恋人はきっとまた来るにちがいない。それでもひとりで行く不安は隠せない。姉にいっしょに行こうとせがんでいる。

アイラス・パイス Airas Pais はガリシア出身のジョグラール。リスボン写本235葉裏の作品冒頭部分とヴァチカン写本110葉裏の欄外余白に「ジョグラールのアイラス・パイス」*«Ayras paez joglar»*と記してある。オウレンセ市の1284年の記録に妻ウツラカ・アネス Urraca Anes の名と並記されている<sup>(6)</sup>。のちにカスティーリャに移り、1293年のサンチョ4世の宮廷文書に名が見える。1303年あるいは翌年にイベリア北東のアラゴンの宮廷に移ったとされるが、以後は記録がとだえている。現在まで伝わる作品は、カンティーガ・デ・アモール2篇、カンティーガ・デ・アミーゴ2篇、あわせて4篇である。

#### 4. アイラス・パイス「愛する人に会うために」

1	Por vee' lo namorado	愛する人に会うために、
2	que muit' há que eu nom vi,	ずっと会えないでいる人に。
3	irmana, treides comigo,	お姉さん、いっしょに来てください。
4	ca me dizem que vem hy	あの人がそこへ来ると私に知らせたのだから。
5	<i>a Santa Maria de Reça.</i>	レサの聖マリアのもとへ。
6	Porque sei ca mi quer bem,	気の毒なあの人が来たことは
7	e porque vem i mu' mui [coi] tado,	わかっているのだから。
8	irmana, treides comigo,	お姉さん、いっしょに来てください。
9	ca sei que vem i de grado	彼が喜んで来るのがわかっているのだから。
10	<i>a Santa Maria de Reça.</i>	レサの聖マリアのもとへ
11	Por vee' lo nomorado	愛する人に会うために、
12	que por mi gram mal levou,	私のせいで傷ついたあの人に。
13	treides comig' ai irmana,	お姉さん、いっしょに来てください。
14	ca mi dizem que chegou	あの人が着いたと私に知らせてきたのだから。
15	<i>a Santa Maria de Reça.</i>	レサの聖マリアのもとへ

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、1286~87番、270葉裏1~2列。ヴァチカン写本、892番、140葉裏1列。Monaci, p.304 ; Braga, p.167 ; Videira Lopes, I, p.134.

(1) vee' lo /lis. va. mo. uello, br. vel lo (2) muit' há /lis. va. mo. muyta, br. muit' a (4) ca me /lis. va. mo. came (5) santa /va. mo. br. sancta ; reça /br. leça [10, 15行も同様] (6) sei /lis. va. mo. ssey ; ca mi /lis. va. mo. cami (7) i /lis. va. mo. br. hi ; mui [coi] tado /lis. va. mo. muytado, br. mu' yrado (9) i /lis. va. mo. br. hi (11) vee' lo /lis. va. mo. uolo, br. vel-o (13) comig' ai /lis. va. mo. comigay

15行3詩節のカンティーガ・デ・アミーゴ。リフレインをともなう。前の作品と同様にヴィデイラ・ロペス校訂本は1~2行と3~4行をあわせて各詩節3行とする。その場合の脚韻の形式は aac aac

bbc である。リスボン写本は第1詩節のあとに「フェルナン・ド・ラゴ」«Fernã do lago» と記す。これは次のカンティーガの作者の名だが、写字生は第2詩節以下を別のカンティーガとして新たな番号(1287番)を附した。ヴァチカン写本は第3詩節までひとつの作品とし、そのあとに次のカンティーガの作者の名を記してある。

約束の場所に恋人が来なかった。「私のせいで傷ついた」ためだという。その傷は癒えたのか。ふたりは再会できそうである。前作と重なっているが新たな展開がある。

ふたつのカンティーガに登場するサンタ・マリア・デ・レサはどのような聖地か。バイアンの詩に歌われたサンタ・マリア・ダス・レイラスのような名高い巡礼地ではない。あるいは語り手の女性たちだけに通じる思い出の場所かもしれない。そこには聖母をまつる小さな礼拝堂か、聖母の名のついた泉などがあればよい。聖母の信心が生活にとけこんだ土地ならではのなつかしい風景がきっとそこにあるのだろう。

### 5. フェルナン・ド・ラゴ「ラゴの聖マリアに」

- 1 D' ir a Santa Maria do Lag' hei gram sabor,
- 2 e pero nom irei alá se ant' i nom for,
- 3 *irmana, o meu amigo.*

ラゴの聖マリアのもとに行くのはうれしいけれど、  
でも私はそこには行かない。そこにいないなら、  
お姉さん、私の愛する人が。

- 4 D' ir a Santa Maria do Lag' é-mi gram bem,
- 5 et pero nom irey alá se ant' i nom vem,
- 6 *irmana, o meu amigo.*

ラゴの聖マリアのもとに行くのはよいことだけど、  
でも私はそこには行かない。そこに来ないなら、  
お姉さん、私の愛する人が。

- 7 Gram sabor haveria [e] no meu coração
- 8 d' ir a Santa Maria se i achass' entom,
- 9 *irmana, o meu amigo.*

心のうちでは聖マリアのもとに行くのはうれしかった。  
もしもそのとき、そこで出会っていたなら、  
お姉さん、私の愛する人に。

- 10 Já jurei noutro dia, quando m' ende parti
- 11 que nom foss' a la ermida se ante nom foss' i,

12 *irmana, o meu amigo.*

いつかある日、私は誓った。たとえ旅立っても、  
あの礼拝堂には行かないと。もしもそこにいないなら、  
お姉さん、私の愛する人が。

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、1288番、270葉裏2列～271葉表1列。ヴァチカン写本、893番、140葉裏1列。  
Monaci, p.304 ; Braga, p.167 ; Videira Lopes, I, p.301.

(1) d' ir /lis. va. mo. dir ; santa /lis. va. mo. sancta ; lag' hei /lis. va. mo. laguey, br. lagu' ey (2) irei /lis. va. mo. br. hyrey ; alá /lis. va. mo. ala, br. a lá ; ant' i /lis. va. mo. anti (4) d' ir /lis. dir, va. mo. vdir ; lag' é-mi /lis. va. mo. lague-mi, br. lago é-mi (5) irei /lis. va. mo. hyrey ; vem /lis. va. ase, br. sen ; mo. [lacuna] (7) haveria /va. mo. br. averia ; no meu /va. mo. nomeu (8) d' ir /lis. va. mo. dir ; i /lis. va. mo. br. hy ; achass' entom /va. mo. a chassentō (10) noutro /br. n' outro ; m' ende /lis. mende, va. mo. br. me de ; parti /va. mo. parci (11) foss' a /lis. fossa, va. mo. falia, br. salia' ; ermida /lis. va. mo. br. hermida ; se /lis. ca, mo. de ; foss' i /lis. va. mo. fossi

12行4詩節のカンティーガ・デ・アミーゴ。リフレインをとまなう。ヴァチカン写本は第2詩節を5行に分ける。リスボン写本にしたがう。脚韻の形式は aae bbe cce dde である。

思い出の聖地に行けば恋人と再会できるかもしれない。それなのに会えなかったときのことを考えると踏み出せないでいる。アイラス・パイスの作品と同様に、聖母の聖地を歌うカンティーガにはひとつの類型が認められる。

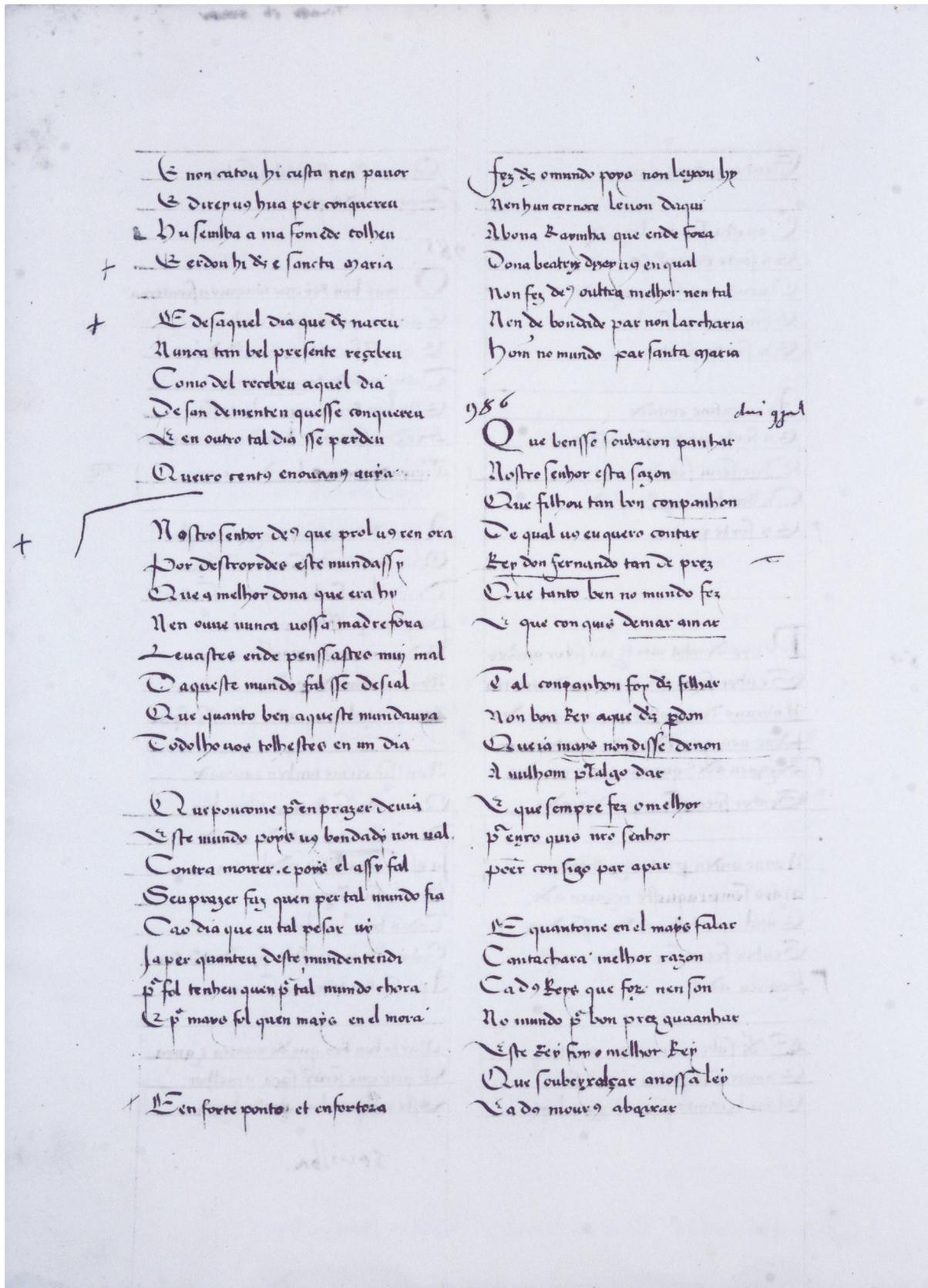
サンタ・マリア・ド・ラゴ Santa Maria do Lago には「礼拝堂」«la ermida» があると語られているが、ここも名だたる聖地ではない。ガリシアの南西、大西洋に面したポンテヴェドラ Pontevedra のサンタ・マリア・デ・ルビャネス Santa Maria de Rubianes にラゴという教区があり、そこからポルトガル国境を越えた先のブラガ Braga 近郊のアマレス Amares にも同名の教区がある<sup>(7)</sup>。いずれに該当するのかは不明である。

フェルナン・ド・ラゴ Fernão do Lago は出身地不明のジョグラール。本作品1篇が伝わるだけである。リスボン写本とヴァチカン写本でその2人あとに出てくるフェルナンド・エスキオ Fernando Esquio と同一視する意見もある。しかしラゴが詩人の出身地であるなら、別人と考えるべきだろう<sup>(8)</sup>。経歴はまったく知られていない。

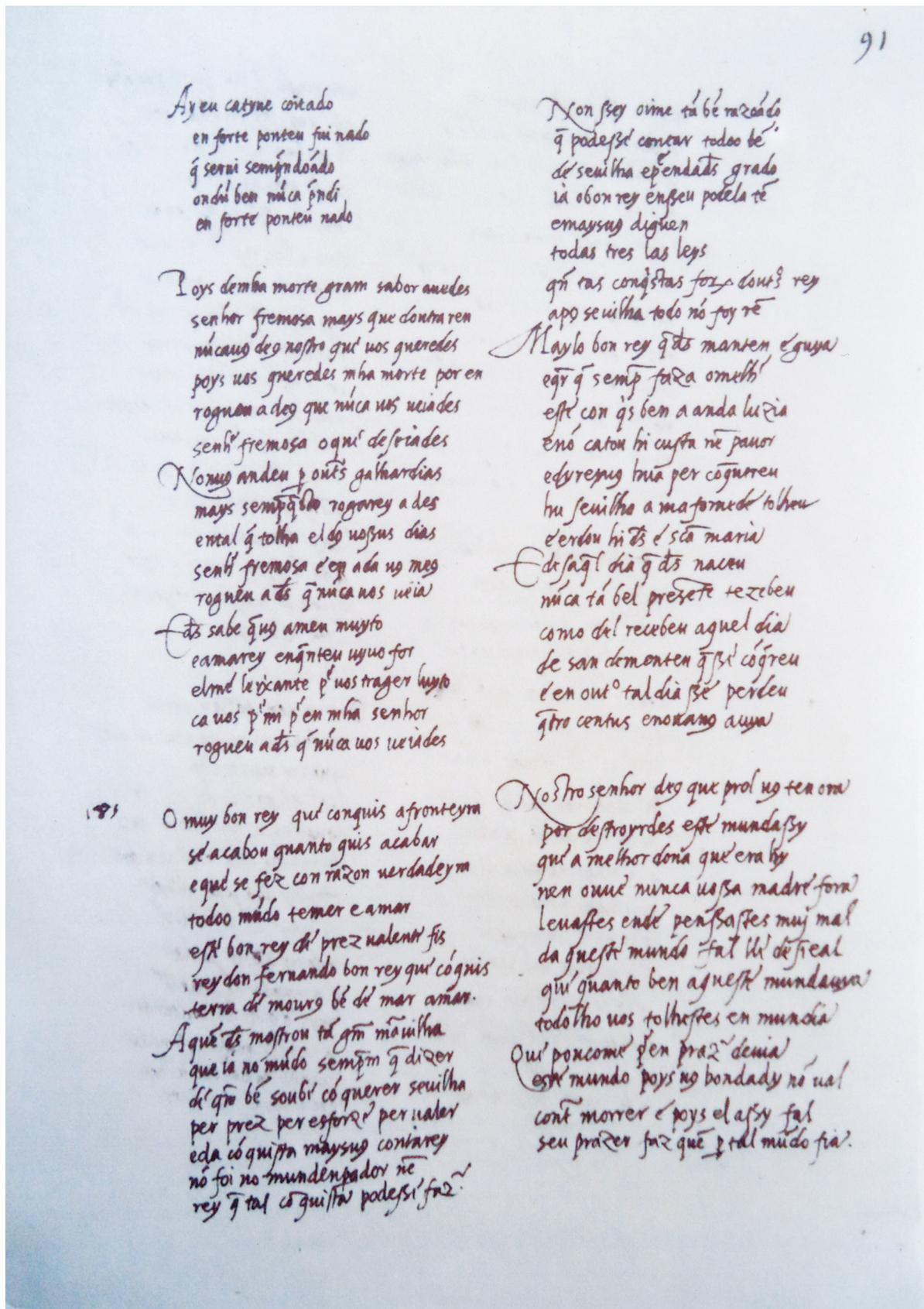
## 第5章 聖母を慕うカンティーガ

### 1. アフォンス・メンデス・デ・ベステイロス「世の婦人の中で」

- |  |                        |
|--|------------------------|
| 1 Senhor fremosa, mais de quantas som  | うるわしい婦人よ、世の婦人の中で       |
| 2 donas no mundo, pol' amor de Deus,   | どんな婦人にも勝るお方。神の愛によって、   |
| 3 doede-vos vós de mim e dos meus      | あなたは私を哀れみ、長いあいだの苦しんで   |
| 4 olhos que choram, há mui gram sazom, | 涙にぬれた私のまなざしを哀れんでくださった。 |



[図 3] リスボン国立図書館カンシオネイロ写本、213葉裏  
 (https://cantigas.fcsh.unl.pt/cancioneirobn.asp)



Ay eu catue coitado  
 en forte ponteui fui nado  
 q' serui sem q'ndoado  
 ondu ben nunca p'ndi  
 en forte ponteui nado

Reys de mba morte gram sabor auedes  
 senhor fremosa mais que contra ren  
 nunca deo nostro que uos queredes  
 poys uos queredes mba morte por en  
 rognem a deo que nunca uos ueiades  
 senti fremosa oqui de s'riades  
 No uos andeu p' onts galhardias  
 mais sempre q' do rognem a des  
 ental q' tolha el do uosus dias  
 senti fremosa e' q' ada no mes  
 rognem a deo q' nunca uos ueia  
 q' de sabe q' uos ameu muito  
 e amarey en q'nteu u' uo for  
 elme lexicante p' uos trager muito  
 ca uos p' mi p' en mba senhor  
 rognem a deo q' nunca uos ueiades

(8)

O muy bon rey qui conquis a fronteyra  
 se acabou quanto quis acabar  
 e qual se fez con rason uerdadeym  
 todoo mudo temer e amar  
 este bon rey de prez ualente fis  
 rey don fernando bon rey qui coquis  
 terra de mouro be de mar amar.  
 A que de mostrou ta qm ma uilha  
 que ia no mudo sempre q' dizer  
 de q' to be soubr' co querer se uilha  
 per prez per estore per ualor  
 e da co quitta mais uo coniarey  
 no foi no munden padov ne  
 rey q' tal co quitta podessi faz.

Non sey oime ta be razado  
 q' podessi concar todoo be  
 de se uilha ep' endado grado  
 ia obon rey en seu podela te  
 emaysug dignen  
 todas tres las leys

q' as conq'stas forz d'out' rey  
 apo se uilha todo no for re  
 Maylo bon rey q' de mantem e guya  
 e q' q' semp' faz a omelha  
 este con q's ben a anda luzia  
 eno caton hi cusa ne pauor  
 edy repug hua per cogurreu  
 hu se uilha a ma formo de tolhou  
 e' erdou hi de e' sta maria  
 de sa q' dia q' deo naceu  
 nunca ta bel prezete tezeben  
 como de' receben aquel dia  
 de san demonten q' se' cogreu  
 e' en out' tal dia se' perdeu  
 q' tro centus enoxamg a uya

Nostro senhor deo que prol no ten ora  
 por de troyrdes este munda sy  
 qui a melhor dona que era hy  
 nen oume nunca uosa madre fora  
 leuaffes ende penbastes muy mal  
 da q'nest' mudo fat hi de fical  
 qui quanto ben agnest' mundayra  
 todotho uos tolhestes en munda  
 Qui pon come p' en prez de uia  
 este mudo poys no bondady no ual  
 cont' morrer e poys el asy fal  
 seu prazer faz que p' tal mudo fia.

[図4] ヴァチカン図書館カンシオネイロ写本、91葉表  
 (https://cantigas.fcsh.unl.pt/cancioneirovaticana.asp)

- 5 por muito mal, senhor, que a mi vem 私を見つめてくださる婦人よ、  
 6 por vós, senhor, a que quero gram bem. あなたに大いなる慈しみを求めます。

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、381番、86葉表1～2列。ヴァチカン写本、欠如。Videira Lopes, I, p.58.

(2) pol' amor /lis. polamor (4) há /lis. a

6行1詩節のみ伝わるカンティーガ・デ・アモール。第2詩節以降は散佚したと考えられている。脚韻の形式は *abbacc* である。この形式の多くは5～6行がリフレインとなる場合が少なくない。この作品もそうであった可能性もある。

かなしみに満ちた私を見つめてくれる婦人にささげられた詩である。言葉のひとつひとつが聖母に哀れみを乞う祈りのように美しい。ここではそれ以上に読み込むことはできないが、この作品に想を得たとされるディニス1世のカンティーガが伝わる<sup>(9)</sup>。やはり聖母の名は語られていないものの、聖母に求める思いの強さがより一層あらわれている。これは次節で読んでいきたい。

アフォンソ・メンデス・デ・ベストイロス Afonso Mendes de Besteiros はポルトガル出身のトロバドル。コインブラの北東、サンタ・マリア・デ・ベストイロス Santa Maria de Besteiros の出身で、貴族 *fidalgo* の末裔である<sup>(10)</sup>。13世紀以前にさかのぼる大貴族 *rico-homem* のリバ・デ・ヴィセラ Riba de Vizela 家につながり、国王サンシュ2世の党派に属した<sup>(11)</sup>。内紛のちにアフォンソ3世が即位したことにより、1248年にサンシュの亡命にしたがってカスティーリャへの国外退去を余儀なくされた。

その後はアルフォンソ10世の宮廷に出入りしたらしい。アンダルシアの戦場でイスラーム教徒に追撃されて逃走した騎士を擲擄するカンティーガを残している<sup>(12)</sup>。現在まで伝わる作品は、カンティーガ・デ・アモール9篇、カンティーガ・デ・アミーゴ2篇、擲擄悪口のカンティーガ3篇、あわせて14篇である。

## 2. ディニス1世「ああ、うるわしい婦人よ」

- 1 Ai senhor fremosa, por Deus ああ、うるわしい婦人よ、神に誓って、  
 2 e por quam boa vos el fez, どんなにか優しい御方として神はあなたを造られた。  
 3 doede-vos algũa vez あなたは私を哀れみ、あのとき私のこのまなざしを  
 4 de mim e destes olhos meus, 哀れんでくださった。  
 5 *que vos virom por mal de si,* あなたは自分の苦しみをみつめ、  
 6 *quando vos virom, e por mi.* そして私の苦しみをみつめてくださる。
- 7 E porque vos fez Deus melhor 神はあなたをすべてにまさる御方として、  
 8 de quantas fez e mais valer, また何よりたっとい御方として造られた。  
 9 queredes-vos de mim doer, あなたは私を哀れみ、私のこのまなざしを  
 10 e destes meus olhos, senhor, 哀れもうとなさる。婦人よ、

- 11 *que vos virom por mal de si,*                   あなたは自分の苦しみを見つめ、  
12 *quando vos virom, e por mi.*                   そして私の苦しみを見つめてくださる。
- 13 E porque o al nom é rem,                   ほかのものは何も価値がない。  
14 senom o bem que vos Deus deu,               神があなたにあたえた慈しみさえあれば。  
15 queredes-vos doer do meu                   あなたは私の苦しみを哀れみ、私のまなざしを  
16 mal e dos meus olhos, meu bem,             哀れもうとなさる。私の愛する御方よ、  
17 *que vos virom por mal de si,*                   あなたは自分の苦しみを見つめ、  
18 *quando vos virom, e por mi.*                   そして私の苦しみを見つめてくださる。

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、518/b番、117葉裏2列~118葉表1列。ヴァチカン写本、121番、14葉裏1列。Monaci, p.52 ; Braga, pp.24sq. ; Videira Lopes, I, pp.188sq.

(2) e por /va. mo. epor (3) algũa /lis. va. mo. br. algunha (4) de mim /lis. br. de mi, va. mo. demĩ ; destes /br. d' estes (5) virom /mo. uirou : de si /lis. va. mo. dessy, br. de ssy [11, 17行も同様] (7) porque /lis. va. mo. por que (9) de mim /lis. br. de mi, va. mo. demĩ (10) destes /br. d' estes (13) porque /lis. va. mo. por que (14) o bem /va. mo. obẽ (15) do meu /lis. va. domeu

18行3詩節のカンティーガ・デ・アモール。リフレインをとまなう。脚韻の形式は各詩節 *abbacc* である。

トロバドールが慕う婦人は自分自身の苦しみを見つめ、そして彼の苦しみをも見つめてくれるという。すでに述べたとおり、第1詩節はアフォンソ・メンデス・デ・ベステイロスの詩の表現に類似し、これにならった作品であることはまちがいない<sup>(13)</sup>。ここに歌われた女性はまったく理想化されており、神の被造物のうちで並ぶものがない存在とされる。ここまでくればもはや聖母マリアにささげられた詩といってよいのではないか。

『聖母マリア讃歌集』*Cantigas de Santa Maria* のなかで聖母をたたえた詩句が思い出される。その序詩に「私たちの主の母なる聖マリア、主の造りたもうた最高の御方」*«Madre de nostro Sennor, Santa Maria, que ést' a mellor cousa que el fez»* とあり、さらにカンティーガ10番に「私たちはこの御方を慕って仕えねばならない。罪を犯さぬよう努めて私たちを見守ってください、あやまちを悔やむようにしてくださるのだから」*«Devemo-la muit' amar e servir, ca punna de nos guardar de falir ; des i dos erros nos faz repentir»* とある<sup>(14)</sup>。この讃歌集はガリシア=ポルトガル語による信仰のカンティーガを集成したもので、カスティーリャ=レオン王国の王アルフォンソ10世のもとで編纂された。王はトロバドールであるディニスの祖父にあたる。

ディニス Dinis 1世は第6代ポルトガル王。アフォンソ3世と王妃ベアトリス・デ・グスマン・エ・カスティーリャ Beatriz de Gusmão e Castela の長男として1261年にリスボンに生まれた。母はアルフォンソ10世と愛人マヨル・ギリェン・デ・グスマン Mayor Guillén de Guzmán の庶子である。ディニスは若いころ母にとまなわれて祖父アルフォンソ10世のセビーリャの宮廷に滞在し、親しくその影響下にあった。

1279年に父アフォンス3世が亡くなると王位を継いだ。それから1325年に没するまでボルゴーニャ朝ポルトガルの最盛期を築いた。王国内ではすでにレコンキスタが終了している。ポルトガル南部のアルガルヴェ地方はアフォンス3世がアルフォンソ10世と領有権を争っていたが、1297年にアルカニセス条約 tratado de Alcanices が結ばれ、現在にいたる両国の国境が確定した。ディニスは公文書におけるラテン語の使用を廃してポルトガル語に改めた。これは祖父のアルフォンソ10世が公文書にカステーリャ語を用いた先例になっている。リスボンに教養学院 Estudo Geral を創設した。1290年に教皇勅書により大学に昇格している。自由学芸学部（今でいう教養学部）を主体としたポルトガル最古の大学で、現在のコインブラ大学の前身である。

ディニスはポルトガル全土の農地を開墾によって拡大させ、商業を振興し、海運の充実をはかった。大航海時代につながる基盤を準備させたのであろう。しかし父王につづいて王領検地 Inquirições gerais を強化したことで一部の貴族が反発し、王の長子アフォンス王子（後のアフォンス4世）と結託して数度の反乱を起こした。これはディニスの晩年までつづくことになる。嫡子アフォンスとコンスタンサ Constança のほかに庶子が数人いる。そのうちアフォンス・サンシェス Afonso Sanches とバルセロス伯ペドロ・アフォンス Dom Pedro, conde de Barcelos はトロバドールとして知られる。ペドロのことは後述したい。

現在まで伝わる作品は、カンティーガ・デ・アモール74篇、カンティーガ・デ・アミーゴ51篇、揶揄悪口のカンティーガ10篇、牧歌詩パストレラ3篇、あわせて138篇である。数量の多さは『カンシオネイロ』のなかでも格段である。

### 3. ディニス1世「プロヴァンスの手法にならい」

1	Quer' eu em maneira de proença	私はプロヴァンスの手法にならい、
2	fazer agora um cantar d' amor,	今ここに愛の歌を作り、そしてわが貴婦人を
3	e querei muit' i loar mia senhor	たつとい御方として大いにたたえたい。
4	a que prez nem fremosura nom fal,	その美しさも優しさも何も欠けるところが
5	nem bondade, e mais vos direi en	ないのだから。その上さらに語りたい。
6	tanto a fez Deus comprida de bem	神はよいもので彼女を満たしたことを。
7	que mais que todas las do mundo val.	世界中に並ぶものがないほどの。
8	Ca mia senhor quisu Deus fazer tal,	なぜなら神がわが婦人を造られたとき、
9	quando a fez, que a fez sabedor	あらゆるよいもので満たそうとされた。
10	de todo bem e de mui gram valor,	大いにたつといもので満たし、そのうえに
11	e com tod' est [o] é mui comunal	大事なときは周囲をなごますことのできる
12	ali u deve ; er deu-lhi bom sem	そうした優れた感覚を彼女にあたえられた。
13	e des i non lhi fez pouco de bem	しかも神は彼女になんの欠点ももたらさず、
14	quando nom quis que lh' outra foss' igual.	どんな婦人も並ぶものがない御方とした。

15	Ca em mia senhor nunca Deus pôs mal,	神は私の婦人にあやまちを宿すことなく、
16	mais pôs i prez e beldad' e loor	讃えるべき魅力と美しさを宿された。
17	e falar mui bem e riir melhor	誰よりもしとやかに語り、優しくほほえみ、
18	que outra molher, des i é leal	誠実であることの魅力を宿されたのである。
19	muit', e por esto nom sei hoj' eu quem	それだから今にいたるまで彼女のすばらしさを
20	possa compridamente no seu bem	語ることのできる者がいるのを私は知らない。
21	falar, ca nom há, tra' lo seu bem, al.	そのすばらしさに勝るものはないのだから。

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、520/b番、118葉表1～2列。ヴァチカン写本、123番、14葉裏2列。Monaci, p.52 ; Braga, p.25 ; Videira Lopes, I, pp.189sq.

(1) quer' eu /lis. va. mo. quereu (2) fazer /lis. faz, va. mo. faz' ; um /lis. va. mo. hun ; d' amor /lis. va. mo. damor (3) mia /lis. mo. br. mha ; senhor /va. mo. senh' (4) que /br. quen ; fremosfera /lis. va. mo. br. fremosfera (6) tanto a /lis. va. mo. tantoa (8) mia /lis. va. mo. br. mha (11) est [o] /lis. va. mo. este, br. est' (12) u /lis. va. mo. br. hu (13) des i /lis. va. mo. br. desy (14) lh' outra /lis. va. mo. lhout ; foss' igual /lis. va. mo. fossigual (15) mia /lis. va. mo. br. mha (16) i /lis. va. mo. br. hi ; beldad' e /lis. va. mo. beldade (17) riir melhor /va. rijrme' lhor, mo. rijrme lhor (18) des i /lis. va. mo. br. desy (19) muit' e /lis. va. mo. muyte ; hoj' eu /lis. va. mo. oieu, br. oj' eu (21) há /lis. va. mo. br. a ; tra' lo /lis. va. mo. tralo, br. tral o

21行3詩節のカンティーガ・デ・アモール。リフレインを持たない。脚韻の形式は3詩節とも同じ *abbacca* である。

冒頭に「プロヴァンスの手法にならい」*«em maneira de proença»* とある。ここに言う「プロヴァンス」は現在のフランス東南部のプロヴァンス地方とは対応しない。多くのトゥルバドールを輩出したかつてのオクシタニア、現在の西南部オクシタニー地方もひとしなみにプロヴァンスと呼び慣わしたのである。その土地の詩歌の手法にならうとは、すなわちフランスのトゥルバドールの伝統にしたがうことである。これはディニスが詩作の理想とするところを宣言した作品にほかならない。

ひそかに慕う婦人の美德を言葉を尽くして讃える。その思いを詩歌の伝統的なスタイルでつづる。すべての詩節が同一の脚韻形式で統一され、リフレインを持たない練達のカンティーガ *«cantiga de meestria»* を実現させている。ここに語られた婦人とは、神が造りたもうた女性の中で並ぶもののない至高の存在だという。これまた聖母マリアを讃えた詩以外の何ものでもなからう。

オクシタニアの言葉であるオック語で書かれたトロバドールの『伝記集』*Vida* がある。そのひとりラインバウト・ダウレンガ *Rainbaut d'Aurenga* は、「プロヴァンスのマリア・ド・ヴェルフィユという名の貴婦人をずっと愛し、歌の中でその御方のジョグラーを名のつた」*«Et amet longa sason una domna de Proensa, que avia nom madomna Maria de Vertfuoil e apellava [la] son joglar en sas chansos»* という<sup>(15)</sup>。ディニスの祖父アルフォンソ王の『聖母マリア讃歌集』10番は、聖母をたたえて「この婦人をわが貴婦人と定め、そのトロバドールに私はなりたい」*«Esta dona que tenno por Sennor e de que quero seer trovador»* と歌った。ここにフランスの世俗のカンソからイベリアの信仰のカンティーガにつらなる流れがある。そしてポルトガルの詩人もそれを受けつだ。

ディニスの文学活動は14世紀の第1四半期におよぶが、このころは12世紀の末からつづいたカンティーガの時代もようやく晩期を迎えつつあった。ポルトガルの首都はリスボンに移ってひさしく、詩歌の言語として重んじられてきたガリシア＝ポルトガル語はもはや「古風な言葉」«archaïsmos»となりつつあった<sup>(16)</sup>。蓄積された遺産を集大成すべき時代がすでに到来したとも言える。世俗のカンティーガにもとづく最初の『カンシオネイロ』はアルフォンソ10世の宮廷写本工房で作られた可能性がある。そこではディニスの庶子である前述のバルセロス伯ペドロ・アフォンスが編纂にかかわったと考えられている<sup>(17)</sup>。

#### 4. ディニス1世「さびしかったあの日に」

1	Senhor, em tam grave dia	婦人よ、さびしかったあの日に
2	vos vi que nom poderia	あなたに出会った。だから私は
3	mais : e por Santa Maria,	みじめではなかった。聖マリアに誓って
4	que vos fez tam mesurada,	心優しいあなたに出会えたのだから。
5	doede-vos algum dia	あの日、あなたは哀れんでくださった。
6	<i>de mi, senhor bem talhada.</i>	私のことを。うるわしい婦人よ。
7	Pois sempre há em vós mesura	あなたはいつも心優しく、
8	e todo bem e cordura,	清らかでつつしみ深い御方。
9	que Deus fez em vós feitura	ほかのどんな婦人もおよばない御方として
10	qual nom fez em molher nada,	神はあなたを造りたもうた。
11	doede-vos por mesura	心優しく哀れんでくださった。
12	<i>de mim, senhor bem talhada.</i>	私のことを。うるわしい婦人よ。
13	E por Deus, senhor, tomade	婦人よ、神に誓って、神があなたに
14	mesura por gram bondade	あたえられた慈しみのおかげで
15	que vos El deu, e catade	あなたは優しさにあふれた御方。
16	qual vida vivo coitada	悲しみに満ちたどんな人生も見つめ、
17	e algum doo tomade	どんな苦しみを抱いても見つめてくださる。
18	<i>de mi, senhor bem talhada.</i>	私のことを。うるわしい婦人よ。

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、550番、123葉裏2列～124葉表1列。ヴァチカン写本、153番、20葉裏2列。Monaci, p.63 ; Braga, p.31 ; Videira Lopes, I, pp.209sq.

(3) e por /mo. epor (4) que vos /va. quevos ; fez /va. mo. fex, br. fes (5) doede-vos /lis. va. doedevos, mo. do edevos ; algum /br. algũ (6) de mi /va. mo. demi (7) pois /va. poy ; sempre há /lis. va. mo. br. sempre a (8) e todo /va. mo. etodo (10) molher /br. mulher (11) doede-vos /lis. va. doedevos (12) de mim /lis. br. de mi, mo. demĩ (17) algum /lis. va. mo. br. algũ (18) de mi /va. mo. demi

18行3詩節のカンティーガ・デ・アモール。リフレインをともなう。脚韻の形式は各詩節 aaabab である。

孤独な心を癒やしてくれた貴婦人を讃え、なぐさめを求めている。ここでもフランスのトゥルバドゥールの伝統にならって理想化された貴婦人が描かれている。とはいえフランスの詩歌に登場する貴婦人は手の届かないところにいる高貴な身であっても、固有名詞をもった意中の奥方であることに変わりはない。ときにはじらされたり、すげなくされたりもする。一気に聖女にまで昇華してしまうことはない。世俗の詩が信仰の世界に踏み込むこともない。

ここには「ほかのどんな婦人もおよばない御方として神はあなたを造りたもうた」とある。しかしそのような女性像は神が創造したのではなく、詩人が心の中で造形したのである。これほどまでに高度に理想化された貴婦人となるともはや聖母に求めるのと変わりがなくなる。そこにガリシア=ポルトガル語によるカンティーガ・デ・アモールのひとつの極点があるように思われる。

## 5. ペロ・ダ・ポンテ「主なる神、今あなたは」

1	Nostro Senhor Deus, que prol vos tem ora	主なる神、今あなたはこのように世を
2	por destróirdes este mund' assi,	乱してどんな益を得ようとなさるのか。
3	que a melhor dona que era i,	あなたの母 [マリア] を除いて、かつて
4	nem houve nunca, vossa madre fora,	おられなかった最高の女性をいつわりと不実な
5	levastes end', e pensastes mui mal	この世から連れ去ってしまうなどという、
6	daqueste mundo fals' e desleal ;	そのことをかえりみようとなさらないのか。
7	que quanto bem aqueste mund' havia,	どれほどすばらしかったこの世の中から
8	todo lho vós tolhestes em um dia.	一日でそのすべてを取り去ろうとなさるのか。
9	Que pouc' home por en prezar devia	この世をありがたがる者などいるのだろうか。
10	este mundo, pois bondad' i nom val	どんなよいことも死を越えることはなく、
11	contra morrer. E pois el assi fal,	不十分なものでしかない、そんな世の中に
12	seu prazer faz quem per tal mundo fia ;	期待する者をあしざまにするだけだから。
13	ca o dia que eu tal pesar vi,	私がこのような苦しみに出会ったその日、
14	já per quant' eu deste mund' entendi,	それでもなおこの先、この世にとどまろうと
15	por fol tenh' eu quem por tal mundo chora,	する者がいるのをなんと愚かなことだと
16	e por mais fol quem mais en' el [e] mora.	思っ涙を流すしかなかったのである。
17	Em forte ponto et em fort [e] hora	時ならぬ時に、また折り悪しき時に、
18	fez Deus o mundo, pois nom leixou i	神は世を造られた。そこになんのなぐさめも
19	nẽum conort [o] e levou daqui	とどめずに、よき王妃として私たちを
20	a bõa rainha, que ende fora,	いたわってくださる御方、ベアトリス妃が
21	dona Beatrix. Direi-vos eu qual :	世を去られた。私はあなた方になんと語ろう。

- |    |                                    |                     |
|----|------------------------------------|---------------------|
| 22 | non fez Deus outra melhor nem tal, | 神はこれ以上のものを創造されなかった。 |
| 23 | nem de bondade par nom lh' acharia | この世の中であの御方に並ぶ者など    |
| 24 | home no mundo, par Santa Maria.    | いるはずがなかろう。聖マリアに誓って。 |

アジュダ写本、461番、25葉欠如。リスボン写本、985/b番、213葉裏1～2列 [図3]。ヴァチカン写本、573番、91葉表2列 [図4] ～裏1列。Vasconcelos, pp.896sq. ; Monaci, pp.205sq. ; Braga, p.110 ; Videira Lopes, II, pp.290sq.

(1) vos /vas. vus (2) mund' assi /lis. va. mo. mundassy (3) i /lis. va. mo. br. hy (4) houve /lis. va. vas. mo. br. ouve (5) end' e /lis. mo. br. ende, va. ende' (6) daqueste /vas. br. d' aqueste, va. mo. da queste ; fals' e /lis. va. mo. fal lle (7) mund' havia /lis. va. mo. mundauya, vas. br. mund' avya (8) lho /vas. br. lh' o (8) um dia /va. mo. mundia. br. hun dia (9) pouc' home /lis. va. mo. poucome, vas. br. pouc' ome ; prezar /mo. ptaz' (10) pois /va. mo. br. poys vos ; bondad' i /lis. va. mo. bondady (12) per /br. por (14) quant' eu /lis. va. mo. quanteu ; deste /vas. d' este ; mund' entendi /lis. va. mo. mudentendi (15) tenh' eu /lis. va. mo. tenheu ; por /vas. per (16) en' /lis. va. vas. mo. en, br. em (17) fort [e] hora /lis. va. mo. fortora, vas. fort [e] ora, br. fort' ora (18) i /lis. va. mo. br. hy (19) nêum /lis. vas. br. nenhun, va. mo. nē hū ; conort [o] e /va. mo. conorte, br. cōhort' e ; daqui /va. mo. daq', vas. br. d' aqui (20) bōa /lis. bona ; ende /vas. end' é (21) beatrix /va. mo. beat' x (23) lh' acharia /lis. larcharia, va. mo. lhacharia (24) home /lis. va. hom', vas. ome ; santa /va. vas. mo. br. sancta

24行3詩節の追悼詩プラント。リフレインを持たない。脚韻の形式は各詩節 abbacdd である。

カスティーリヤの王フェルナンド3世の妻で1235年11月に亡くなったベアトリス・デ・スアビア Beatriz de Suábia の死をいたむ。3行目に「あなたの母」«vossa madre» とあるのを、フェルナンド王の母ベレンゲラ Berenguela と解する意見がある<sup>(18)</sup>。しかし第1詩節は一貫してトロバドールが神に語りかけているのだから、ここは神の母マリアと解すべきだろう。

ベアトリスの父は神聖ローマ皇帝ハインリッヒ6世の弟シュヴァーベン公フィリップ Philipp von Schwaben、母は東ローマ皇帝イサアキオス2世アンゲロス Isaakios II Angelos の娘イレネ・アンゲリナ Irene Angelina である。東西ヨーロッパのふたつの帝国の血統を継いでいる。フェルナンド3世とのあいだにもうけた長子がアルフォンソ10世である。アルフォンソは母の後見をたのみとして神聖ローマ皇帝の位を望んだが実現できなかった。しかし母を通じてヨーロッパ文化の伝統がカスティーリヤにもたらされたことの意義は甚大である。『聖母マリア讃歌集』の作成をはじめとする旺盛な知的活動にそれがうかがえよう。

ペロ・ダ・ポンテ Pero da Ponte はガリシア出身のトロバドール。ダ・ポンテという呼称はガリシアのポンテヴェドラ Pontevedra にちなむとされる。その地の記録にペロ・フェルナンデス・ダ・ポンテ Pero Fernandes da Ponte とペロ・アネス・ダ・ポンテ Pero Anes da Ponte という名が出てくる<sup>(19)</sup>。しかしカンシオネイロの写本に父称が書かれていないため、どちらか確定できない。ただ、いずれの人物もその地位はセグレル segrel であった。これはトロバドールのなかでも技芸を披露して宮廷間を移動していく流動的な階層で、遍歴する芸能者ジョグラールとの違いは明確ではない。ペロ・ダ・ポンテがカスティーリヤにわたり、フェルナンド3世とアルフォンソ10世の宮廷につかえたことはいくつかの作品から知られる<sup>(20)</sup>。

カンティーガのひとつにギラウト・リキエル Guiraut Riquier の歌 canso からの影響が指摘されている<sup>(21)</sup>。リキエルはフランスのトゥルバドゥールの中でもっとも遅い世代に属し、その活動は1260年以降とされる。またアルフォンソ10世の弟マヌエル王子 Infante Manuel を題材としたカンティーガがある。これは王子を批判する内容である<sup>(22)</sup>。兄弟の確執は1277年に表面化した。ここからその制作年代とペロ・ダ・ポンテの宮廷における立場が推測できる。現在まで伝わる作品は、カンティーガ・デ・アモール7篇（うち2篇は作者に疑義もある）、カンティーガ・デ・アミーゴ7篇、揶揄悪口のカンティーガ31篇、討論詩テンサオン3篇、追悼詩プロント5篇、讃美の歌カンティーガ・デ・ロール cantiga de loor 2篇、あわせて55篇である。

追悼詩プラントはフランスのプラニュ planh にならったものだが、女性の死をいたむことは俗語文芸において南フランスからヨーロッパの国々に拡大した新しい潮流だった<sup>(23)</sup>。本作品は女性にささげられた追悼詩としてガリシア=ポルトガル語のカンティーガの中で異例とされるものの、汎ヨーロッパ的な動向にむしろ結びついている。とりわけ第3詩節の結びの部分は、俗語文芸の枠をこえてラテン中世における追悼の讃辞 laudatio funebris の伝統につながるものであろう<sup>(24)</sup>。

## 第6章 中世ポルトガルの聖母信仰

### 1. 世俗のカンティーガ

ガリシア=ポルトガル語による文学作品は『カンシオネイロ』の写本3冊と写本断片2点によって伝わる世俗のカンティーガ1680篇と『聖母マリア讃歌集』の写本4冊によって伝わる信仰のカンティーガ420篇がそのすべてである。本稿はそのうち世俗のカンティーガのいくつかを読み解きながら中世の聖母信仰のありようを探ろうとこころみた。

ここではカンティーガ・デ・アモールから8篇、カンティーガ・デ・アミーゴから10篇、牧歌詩パストレラから1篇、追悼詩プラントから1篇、あわせて20篇を取りあげた。『カンシオネイロ』のなかで聖母の名が登場する作品は60篇ほどあるが、そこには「神と聖マリア」«Deus e Santa Maria»を並び称しただけの詩句もあれば、およそ信心にかかわらないものもある。一方で聖母の名は示さないものの、あきらかに聖母をたたえたと思われる作品もある。本稿では後者も取りあげることにした。

カンティーガ・デ・アモールはフランスのトゥルバドゥールの詩歌の影響をもっとも強く受けたジャンルである。高貴な婦人をひそかに慕い、報われることのない思いを抱きつづける。そうした宮廷社会における愛の理想像が歌われていた。そうした思いはガリシア=ポルトガル語のカンティーガの世界ではよほど純真で一途なものに昇華していく。貴婦人はまったく理想化され、神の被造物のなかでも至高の存在と見なされる。そこまで来るとそれはもはや聖母マリアを措いてほかにはありえなくなる。すでに観念の世界であり、究極の女性として聖母をたたえる讃歌と変わりがない。このことは追悼詩においても言える。亡き人にささげる追悼の讃辞はヨーロッパの中世の伝統につながるものだが、そこでは並ぶものがない聖母にあえて故人を並べて賞讃したのである。

フランスでもトゥルバドゥール芸術が晩期を迎えるころには世俗のカンソが信仰のそれに転換していく。亡き貴婦人をいたむ詩がそのまま聖母をたたえる讃歌となった<sup>(25)</sup>。最後のトゥルバドゥールとされるギラウト・リキエルの『27番目のヴェルス』*Lo XXVII vers* は、「慈愛の母なる婦人、私

たちの罪をあがなうあなたの息子の哀れみで、恵みと救しと愛が得られますように」*«Dona, maires de caritat, acapta nos per pietat de ton filh, nostre redemptor, gracia, perdon et amor»* と歌う<sup>(26)</sup>。あたかも教会でくりかえされる聖母の祈りの言葉で宮廷世界の詩が閉じられた。

カンティーガ・デ・アミーゴはこれに対し、市井に暮らす人それぞれの思いにつながっている。もどらぬ日々を追憶し、聖母になぐさめを求める。かなわなかった恋をいとおしみ、聖母にさびしさを訴える。誓いを立てるときも聖母を頼みにした。聖母だけが語り手に寄り添ってくれる。そこで語られているのは誰もが抱くありきたりな痛みかもしれない。だからかえって心にしみてくるのか。このジャンルのカンティーガはガリシア＝ポルトガル語の古い詩歌にさかのぼるものと考えられており、民族の心につながっているだろう。人々の信仰生活のなかに聖母への信心があることをこうした詩歌を通じて実感できる。

擲揄悪口のカンティーガはガリシア＝ポルトガル語の文芸において重要な領域だが、ここにも聖母の名は登場する。ただし信心にかかわるものはいたって少ない。ロポ・リアス Lopo Lias というガリシア出身のトロバドルがいた。13世紀前半に活動したとされる<sup>(27)</sup>。イベリア北東のレモス Lemos の領主の息子たちを嘲笑した連作カンティーガがあり、そのひとつに「ようやく暴れ馬の仕度がととのった。だが乗っていくつもりはない。ばかでかい鞍はもうこりごりだ」*«Ora tenho guisado de m' achar o zevrom, nom and' encavalgado nem trag' er selegom»* とある<sup>(28)</sup>。トロバドルは意中の貴婦人から鞍を贈られた。由緒ある品らしいがすっかり老朽化していた。毘をしかけたレモスの騎士が鞍のきしむ音におじけづいて逃げたと別のカンティーガは語る<sup>(29)</sup>。それで命拾いしたのだが、ここではもうそんな鞍はこりごりだという。とうとう「聖マリア、助けてください」*«Val-mi Santa Maria»* と叫ぶ始末だった。

リスボン写本冒頭の「詩作の技術」に、擲揄のカンティーガは相手の名をあからさまに示さずいくえにも取れる言葉で語るとある<sup>(30)</sup>。当時の人には笑われている当人の名がわかったはずだが、今となつては推測するしかない。この連作はカスティーリャ王国のアルフォンソ8世の後継問題に関係するらしい<sup>(31)</sup>。1214年に王が亡くなると、長女ベレンゲラ Berenguela とカスティーリャの貴族ヌーニョ・ペレス・デ・ララ Nuño Pérez de Lara の息子たちとのあいだに抗争が生じた。カンティーガのなかでレモスの領主の息子たちに仮託されたのはララー族であろう。1217年にベレンゲラは女王に即位し、同じ年のうちに自分の息子に王位をゆずった。これが聖王フェルナンド3世、すなわちアルフォンソ10世の父である。

いったいこのジャンルのカンティーガにも聖母の名は登場するが、信心にかかわるものはほとんどない。はなはだしくは脚韻を -ia でそろえるためにマリア Maria の名が使われるだけのときもある。それでも切実に求めることがあるとき、「聖マリアに誓って」という言葉を思わず口にする。それは何かを願う際に日常的にくりかえされる類型表現にちがいない。

牧歌詩はヨーロッパの古い伝統にならい、のどかな田園を背景としてトロバドルの騎士と羊飼いの娘の出会いと恋のかけひきが展開していく。言い寄る騎士をかわすとき、娘は聖母にすがって男の要求をこぼむのである。神かけて誓うときも、神ではなく聖母の名が真っ先に出てくる。神ではなく聖母に求めた。聖母の信仰がしみついた風土のなかでは、祈るときもまず聖母に祈り、神へのとりなしを願ったのである。

## 2. 信仰のカンティーガ

信仰のカンティーガは『聖母マリア讃歌集』に収められている。大きく分けるならば、聖母の奇跡をあつかうカンティーガと特定の主題をもたない讃美の歌 *cantiga de loor* によって構成される(本節の記述は紀要掲載中の拙稿「聖母マリアのカンティーガ(1)～(5)」に対応するものである)。

讃美の歌のひとつ、カンティーガ10番は聖母を「薔薇の中の薔薇」*«rosa das rosas»* とたたえる。ここでは「この婦人をわが貴婦人と思ひさだめ、そのトロバドールに私はなりたい」*«Esta dona que tenno por Sennor e de que quero seer trobador»* と歌われた<sup>(32)</sup>。高貴な婦人を意中の人と慕って身をささげるのは、世俗のカンティーガ・デ・アモールにおける宮廷の愛の精神にかなったものだが、ここではそれがただちに聖母に結びついている。その思いを詩歌の調べに乗せて歌いあげるのがトロバドールの役割であり、彼らが献身すべき貴婦人とは聖母その人にほかならない。この『讃歌集』を編纂させたアルフォンソ10世もその役割をみずからに課した。「この御方のために私は今からのちトロバドールになりたい」*«por aquest' eu quero seer oy mais seu trobador»* と序詩に歌っている<sup>(33)</sup>。

『讃歌集』の編纂はアルフォンソがカスティーリャ＝レオン国王に即位した1252年から没年の1284年までのあいだになされた。『カンシオネイロ』に収める世俗のカンティーガの多くは同時代もしくはこれに遅れるが、なかには先行する作品もあるにちがいない。とりわけカンティーガ・デ・アミーゴには古拙なまでの感情のほとぼしりが感じられた。それよりもよほど洗練されているカンティーガ・デ・アモールでさえ、フランスのトゥルバドールの作品が内に秘めた愛を節度と屈折をもって語りかけるのとはかなりへだたりがあった。そしてまさにその点において『讃歌集』とのつながりも予想されよう。

カスティーリャで作られた『讃歌集』はガリシア＝ポルトガル語の故郷に結びついている。そのことを踏まえたうえで、ヨーロッパのほかの地域とのかかわりについても考える必要がある。信仰のカンティーガの大部分を占める聖母の奇跡という主題は、ヨーロッパ中世の巨大な遺産を背景として成り立っている。ラテン語で書かれた奇跡物語について俗語による作品が12世紀頃から現れた。1165年以後にイングランドの聖職者アドガル Adgar が『恩寵の書』*Le Gracial* と題してアングロ・ノルマン語による最初の集成を編纂した。これは中世フランス語の系統に属する言語で、当時のイングランドが置かれた歴史的状況を反映している。これにやや遅れてフランスの修道士ゴートイエ・ド・コワンシー Gautier de Coinci が『聖母の奇跡集』*Les miracles de Nostre Dame* を著した。イベリアでは13世紀にゴンサロ・デ・ベルセオ Gonzalo de Berceo がカスティーリャ語による『聖母の奇跡集』*Milagros de Nuestra Señora* を著した。アルフォンソ王の『讃歌集』はそのあとに位置する。

これらの俗語集成に語られた聖母の奇跡のいくつかは、その時代に多くの巡礼を集めた各地の聖所と深い関わりをもっていた。むしろ聖地巡礼の興隆とともに、こうした物語が語り出されたとも言える。上記の集成はいずれも『讃歌集』の成立にさまざまな影響をあたえ、あるいは直接の典拠を提供した。中世の人々にしたところで奇跡が日常の出来事であるはずはない。それでも非日常の空間である聖地は奇跡が現出する場となり得た。くりかえし語られてきた奇跡だけでなく、続々と生起する奇跡が新たに語り出される。信仰のカンティーガはそうした新旧の物語を集積する媒体となった。マリアの聖地はカンシオネイロにも登場したが、『讃歌集』にはおびただしいほどに登場する。

奇跡物語の源泉の所在はかならずしもイベリア内部にとどまらない。『讃歌集』の最初の編纂段階

で成立したとされる100番までのカンティーガのうち、讚美の歌をのぞく奇跡物語は89篇ある。そのうちイベリアの外部に源泉を求められる作品は8割以上におよぶ。場所が特定できないものもあるから数字はもとより目安にすぎないが、それにしてもアルフォンソ王が最初に計画した集成にあっては、西欧世界との連続がきわめて顕著だったことがうかがえる。だがこの傾向は番号が進むにつれて変化していく。

『讚歌集』の編纂は次の段階で200番まで増加するが、新たに加わった奇跡物語のうちイベリアの外部に求められるものと内部に求められるものはその数がほぼ拮抗する。つづく201番以降の編纂段階ではこれが逆転して内部のものが外部のもの倍以上にふくれあがった。アルフォンソ王の生涯を語るカンティーガもそこに含まれ、これも番号が進むごとに増加する。そうした背景には、人々の目が、そして何よりも王の目が内向きになっていく視線の変化があったと考えられる。

聖母のトロバドルをもってみずからを任じたアルフォンソ王は、カンティーガ279番のなかで「あなたのトロバドルを助けてください」*«acorred' a vosso trobador»* と懇願する<sup>(34)</sup>。「あなたをたたえるこの者」*«este vosso loador»* が苦しんでいるのだと聖母にあわれみを乞う。聖母を神に「とりなす方」*«rezoador»* つまり仲介者と頼み、また「助けてくださる方」*«ajudador»* つまり救助者として期待する。さらに「あらゆる恵みをさずける方」*«galardoador de todo ben»* と呼び、「病を癒やす方」*«do mal saador»* とも呼んでいる。たたみかけるように聖母の別称を連呼していく手法は、教会の典礼で唱える続禱 *litanía* を思わせる。

神聖ローマ皇帝への即位に挫折して以後、王の健康はいちじるしくそこなわれた。同じ279番は蒼白になった王の表情を透き通るほどの布の白さにたとえており、病の深刻さを物語っている。そうしたなかでくりかえされる「聖マリア、お救いください。ああ、私の貴婦人」*«Santa Maria, valed', ai Sennor»* というひびきは、ひたむきなまでに直截であり、技巧にあふれたどんなカンティーガよりも胸にせまる。心の傷を癒やすことのできない老残の王、かつて賢王 *el Sabio* と称されたこの人が聖母に寄りすがった。そうした憂いがカンティーガにたたえられている。

聖母に向けられた信仰告白ともいえるこの『讚歌集』を同時代の神学のなかに位置づけることは可能だろうか。カンティーガが作られたのは聖母の無原罪御宿りの信仰が高揚するはるか前の時代である。無原罪御宿りとは聖母が肉のまじわりによらず、したがって原罪をはなれ、神の恩寵によってその母アンナの胎内に宿ったとする信仰である。やがてイベリアにおいてさかんになっていく信仰だが、いまだカンティーガに「無原罪」という言葉は登場しない。聖母にささげられた詩歌集であっても、当時の聖母神学とはなんら接点をもたないという見方もある。しかしその萌芽が詩句にあらわれているならば『讚歌集』を聖母信仰史の大きな流れのなかに置くことができる<sup>(35)</sup>。

カンティーガ411番は神がアンナの胎内の子を原罪から解放したことを語る。マリアが「母のなかにいたとき、私たちの父アダムが〔悪魔に〕そそのかされて犯した罪から解き放たれた」*«E logo que foi viva no corpo de sa madre, foi quita do pecado que Adan, nosso padre, fezera per consello»* とある<sup>(36)</sup>。310番はマリアが母胎に宿ったときすでに清められていたと語る。「彼女は母の胎内で父〔ヨアキム〕の子となったときからずっと聖なるものとされた」*«Ca sempre santivigada foi des que a fez seu padre eno corpo de sa madre»* とある<sup>(37)</sup>。このように神学の書ではない詩歌の書が堂々と無原罪の完全性を表明したのである。それは信念と言ってよいものであり、同時代の神学にはるかに先

んじていた。

聖母を至高の貴婦人と歌う『讃歌集』のトロバドールにとって、けがれのないマリアの聖性は何よりたっとぶべきものだったろう。無原罪の信仰がカトリック教会の正式な教義として認められるまでにはさらに幾世紀もの時間を要するが、すでにイベリアにおいてその先駆けとも言える文学が語り出されていた。やがてイベリアはキリスト教国によって統一され新しい時代をむかえる。そのとき聖母の信仰がヨーロッパのどの国よりもさかんにおこなわれるようになっていく。

## 注

- (1) Joaquim Teófilo Fernandes Braga, *Cancioneiro português da Vaticana, Edição crítica restituída sobre o texto diplomático de Halle*, Imprensa Nacional, Lisboa, 1878, p.xlvii.
- (2) José Augusto Pizarro, *Linhagens medievais portuguesas : genealogias e estratégias 1279-1325*, I, Centro de Estudos de Genealogia, Heráldica e História da Família da Universidade Moderna, Porto, 1999, p.294.
- (3) Graça Videira Lopes, *Cantigas medievais galego-portuguesas : Corpus integral profano*, II, Biblioteca Nacional de Portugal, Lisboa, 2016, p.594.
- (4) Videira Lopes, *op. cit.*, p.w. [Airas Pais, «Quer' ir a Santa Maria»]
- (5) Xosé Filgueira Valverde, *Estudios sobre lírica medieval, traballos dispersos (1925-1987)*, Editorial Galaxia, Vigo, 1992, p.68.
- (6) António Resende de Oliveira, *Depois do espectáculo trovadoresco. A estrutura dos cancioneiros peninsulares e as recolhas dos séculos XIII e XIV*, Edições Colibri, Lisboa, 1994, p.319.
- (7) Videira Lopes, *op. cit.*, p.w. [Fernão do Lago, «D' ir a Santa Maria do Lag' hei gram sabor»]
- (8) Resende de Oliveira, *op. cit.*, p.336.
- (9) Henry Roseman Lang, *Das Liederbuch des Königs Denis von Portugal*, Max Niemeyer, Halle, 1894, S.123.
- (10) Resende de Oliveira, *op. cit.*, p.309
- (11) Augusto Pizarro, *op. cit.*, p.548.
- (12) Afonso Mendes de Besteiros, «Dom Foão, que eu sei que há preço de livão», Videira Lopes, *op. cit.*, I, p.60.
- (13) Lang, *op. cit.*, S.123.
- (14) Walter Mettmann, *Afonso X, o Sábio, Cantigas de Santa Maria*, I, Acta universitatis Conimbrigensis, Coimbra, 1959, pp.2sq., 33.
- (15) Camille Chabaneau, *Les biographies des troubadours en langue provençale*, Édouard Privat, Toulouse, 1885, p.76.
- (16) Carolina Michaëlis de Vasconcelos, *Cancioneiro da Ajuda, edição crítica e commentada*, I, Max Niemeyer, Halle, 1904, p.xix.
- (17) Videira Lopes, *op. cit.*, I, p.15.
- (18) Videira Lopes, *op. cit.*, p.w. [Pero da Ponte, «Nostro Senhor Deus, que prol vos tem ora»]
- (19) Xavier Ron Fernández, “Carolina Michaelis e os trovadores representados no Cancioneiro da Ajuda”, Mercedes Brea (ed.), *Carolina Michaelis e o Cancioneiro da Ajuda, hoxe*, Xunta de Galicia, Santiago de Compostela, 2005, p.180.
- (20) Pero da Ponte, «Vistes, madr', o escudeiro que m' houver' a levar sigo» ; Afonso Anes de Cotom, «Pero da Pont' e[m] um vosso cantar», Videira Lopes, *op. cit.*, I, p.31 ; II, p.281.
- (21) Pero da Ponte, «Agora me part' eu mui sem meu grado», Videira Lopes, *op. cit.*, II, p.287.
- (22) Pero da Ponte, «Mort' é Dom Martim Marcos, ai Deus, se é verdade», Videira Lopes, *op. cit.*, II, pp.314sq.
- (23) Alfred Jeanroy, *La poésie lyrique des troubadour*, II, Privat, Toulouse, 1934, p.42.
- (24) Esther Corral Díaz, “A morte en feminino na lírica galego-portuguesa : o pranto pola morte de Beatriz de

- Suabia”, *Revista de literatura medieval*, XXIX, Santiago de Compostela, 2017, p.104.
- (15) Joseph Anglade, *Le troubadour Guirault Riquier : Étude sur la décadence de l'ancienne poésie provençale*, Feret et fils Éditeurs, Bordeaux, 1905, pp.294sq.
- (26) id., *Anthologie des troubadour*, Édition de Boccard, Paris, 1927, p.181.
- (27) José António Souto Cabo, “Lopo Lias : entre Orzelhão e Compostela”, *Diacrítica*, XXV/3, Universidade do Minho, 2011, pp.111sq.
- (28) Lopo Lias, «Ora tenho guisado», Videira Lopes, *op. cit.*, II, pp.53sq.
- (29) Lopo Lias, «Os zevrões foram buscar», Videira Lopes, *op. cit.*, II, p.53.
- (30) Videira Lopes, *op. cit.*, II, p.591.
- (31) Vicenç Beltran, “Lopo Liáns, em cas da ifante”, *Medievalismo en Extremadura : Estudios sobre Literatura y Cultura Hispánicas de la Edad Media*, Universidad de Extremadura, Cáceres, 2009, pp.633-640.
- (32) Mettmann, *op. cit.*, I, p.33.
- (33) Mettmann, *op. cit.*, I, p.3.
- (34) Mettmann, *op. cit.*, III, pp.72sq.
- (35) Cristina Álvarez Díaz, “La doctrina inmaculista en las Cantigas de Santa María de Alfonso X el Sabio”, Francisco Javier Campos y Fernández de Sevilla (ed.) , *La Inmaculada Concepción en España : religiosidad, historia y arte*, II, Instituto Escorialense de Investigaciones Históricas y Artísticas, El Escorial, 2005, p.1222.
- (36) Mettmann, *op. cit.*, III, p.379.
- (37) Mettmann, *op. cit.*, III, p.146.

#### 参考文献

- Alvar Ezquerra, Carlos, “María Pérez, Balteira”, *Archivo de filología aragonesa*, XXXVI-XXXVII, Zaragoza, 1985.
- Álvarez Díaz, Cristina, “La doctrina inmaculista en las Cantigas de Santa María de Alfonso X el Sabio”, Francisco Javier Campos y Fernández de Sevilla, *La Inmaculada Concepción en España : religiosidad, historia y arte*, II, Instituto Escorialense de Investigaciones Históricas y Artísticas, El Escorial, 2005.
- Anglade, Joseph, *Le troubadour Guirault Riquier : Étude sur la décadence de l'ancienne poésie provençale*, Feret et fils Éditeurs, Bordeaux, 1905.
- Anglade, Joseph, *Anthologie des troubadour*, Édition de Boccard, Paris, 1927.
- Bartsch, Karl, *Chrestmachie provençale, X<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècles*, Elberfeld, Marburg, 4<sup>e</sup> éd., 1880.
- Beltran, Vicenç, “Lopo Liáns, em cas da ifante”, *Medievalismo en Extremadura : Estudios sobre Literatura y Cultura Hispánicas de la Edad Media*, Universidad de Extremadura, Cáceres, 2009.
- Bloch, Oscar, et Wartburg, Walther von, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Presses Universitaires de France, Paris, 6<sup>e</sup> éd., 1975.
- Carvalho da Silva, Joaquim, *Dicionário da língua portuguesa medieval*, Editora da Universidade Estadual de Londrina, Londrina, 2<sup>a</sup> edição revisada e ampliada, 2009.
- Chabaneau, Camille, *Les biographies des troubadours en langue provençale*, Édouard Privat, Toulouse, 1885.
- Corral Díaz, Esther, “A morte em feminino na lírica galego-portuguesa : o pranto pola morte de Beatriz de Suabia”, *Revista de literatura medieval*, XXIX, Santiago de Compostela, 2017.
- Eirin, Leticia, “As cantigas do pergaminho Sharrer. Motivos fundamentais”, Graça Videira Lopes e Manuel Pedro Ferreira, *Do canto à escrita : Novas questões em torno da lírica galego-portuguesa, Nos cem anos do pergaminho Vindel*, Centro de Estudos de Sociologia e Estética Musical, Lisboa, 2015.
- Fernandes Braga, Joaquim Teófilo, *Cancioneiro português da Vaticana, Edição crítica restituída sobre o texto diplomático de Halle*, Imprensa Nacional, Lisboa, 1878.

- Ferreira, Manuel Pedro, “Leo o pergaminho Vindel : suporte, textos, autor”, Graça Videira Lopes e Manuel Pedro Ferreira, *Do canto à escrita : Novas questões em torno da lírica galego-portuguesa, Nos cem anos do pergaminho Vindel*, Centro de Estudos de Sociologia e Estética Musical, Lisboa, 2015.
- Filgueira Valverde, Xosé, *Estudios sobre lírica medieval, traballos dispersos (1925-1987)*, Editorial Galaxia, Vigo, 1992.
- Frata, Aniello, *Peire d’Alvernhe, Poesie*, Vecchiarelli Editore, Manziana, 1996.
- Frateschi Vieira, Yaraz, *En cas dona Maior : Os trovadores e a corte senhorial galega no século XIII*, Edicións Laiovento, Noia, 1999.
- Instituto de Estudos Medievais, Universidade Nova de Lisboa, “Cantigas medievais galego-portuguesas”, <http://cantigas.fcsh.unl.pt/>
- Jeanroy, Alfred, *Les chansons de Jaufré Rudel*, Les classiques français du moyen âge, Honoré Champion, Paris, 1915.
- Jeanroy, Alfred, *La poésie lyrique des troubadour*, 2 vol., Privat, Toulouse, 1934.
- Lanciani, Giulia, e Tavani, Giuseppe, *Dicionário da literatura medieval galega e portuguesa*, Editorial Caminho, Lisboa, 1993.
- Lang, Henry Roseman, *Das Liederbuch des Königs Denis von Portugal*, Max Niemeyer, Halle, 1894.
- Lang, Henry Roseman, *Cancioneiro d’el Rei dom Denis, 1897* : republ. *Cancioneiro d’el Rei dom Denis e estudos dispersos*, Editora da Universidade Federal Fluminense, Niterói, 2010.
- Leão, Maria Dulce, “Notre Dame dans la littérature portugaise”, Hubert du Manoir, *Maria, Études sur la Sainte Vierge*, II, Beauchesne, Paris, 1952.
- Lindley Cintra, Luís Filipe, *Cancioneiro da Biblioteca Nacional (Colocci-Brancuti) cód.10991, reprodução facsimilada*, Imprensa Nacional, Casa de Moeda, Lisboa, 1982.
- Mattoso, José, “A nobreza medieval portuguesa no contexto peninsular”, *Naquele Tempo. Ensaios de História Medieval*, Círculo de Leitores, Lisboa, 2000.
- Mettmann, Walter, *Afonso X, o Sábio, Cantigas de Santa Maria*, 4 vol., Acta universitatis Conimbrigensis, Universidade de Coimbra, 1959-72.
- Mettmann, Walter, “Airas Nunes, Mitautor der Cantigas de Santa Maria”, *Iberoromania*, III, Madrid, 1971.
- Miranda, José Carlos, “Será Afonso, o sábio, o «autor anónimo» de A36-A39 ?”, Maria do Rosário Ferreira, Ana Sofia Laranjinha e José Carlos Miranda, *Seminário medieval 2009-2011, Estratégias Criativas*, Porto, 2011.
- Monaci, Ernesto, *Il canzoniere portoghese della Biblioteca Vaticana*, Max Niemeyer, Halle, 1875.
- Monteagudo, Henrique, *Letras primeiras. O Foral de Caldelas, os primórdios da lírica trobadoresca e a emergência do galego escrito*, Fundación Pedro Barrié de la Maza, Corunha, 2008.
- Montero Santalha, José-Martinho, “As cantigas de Airas Páez”, edição digital, 2004.
- Montero Santalha, José-Martinho, “A cantiga de Fernám do Lago : «D’ ir a Santa Maria»”, edição digital, 2004.
- Pizarro, José Augusto, *Linhagens medievais portuguesas : genealogias e estratégias 1279-1325*, 2 vol., Centro de Estudos de Genealogia, Heráldica e História da Família da Universidade Moderna, Porto, 1999.
- Pousada Cruz, Miguel Ángel, “Las cantigas de Sancho Sanchez, clérigo”, *Estudios románicos, Revista de filología románica*, XXIV, Murcia, 2015.
- Resende de Oliveira, António, *Depois do espectáculo trovadoresco. A estrutura dos cancioneiros peninsulares e as recolhas dos séculos XIII e XIV*, Edições Colibri, Lisboa, 1994.
- Resende de Oliveira, António, “O irrequieto Cancioneiro profano do rei Sábio”, *Revista portuguesa de história*, XLIV, Faculdade de Letras da Universidade de Coimbra, Instituto de História Económica e Social, Coimbra, 2013.
- Rios Milhám, José, “Lírica trobadoresca em língua portuguesa, Exercícios ecdóticos, II”, edição digital, 2018.
- Ron Fernández, Xabier, “Carolina Michaelis e os trovadores representados no Cancioneiro da Ajuda”, Mercedes

- Brea, *Carolina Michaelis e o Cancioneiro da Ajuda, hoje*, Xunta de Galicia, Santiago de Compostela, 2005.
- Rychner, Jean, *La chanson de geste : Essai sur l'art épique des jongleurs*, Droz, Genève, 1955.
- Souto Cabo, José António, "Lopo Lias : entre Orzelhão e Compostela", *Diacrítica*, XXV, Universidade do Minho, 2011.
- Souto Cabo, José António, "En Santiago, seend' albergado en mia pousada. Nótulas trovadorescas compostelanas", *Verba, Anuario galego de filoloxia*, XXXIX, Santiago de Compostela, 2012.
- Souto Cabo, José António, *Os cavaleiros que fizeram as cantigas. Aproximação às origens socioculturais da lírica galego-portuguesa*, Editora de Universidade Federal Fluminense, Niterói, 2012.
- Souto Cabo, José António, "In capella domini regis, in ulixbona e outras nótulas trovadorescas", Antonia Martínez Pérez y Ana Luisa Baquero Escudero, *Estudios de literatura medieval : 25 años de la Asociación Hispánica de Literatura Medieval*, Universidad de Murcia, Servicios de Publicaciones, Murcia, 2012.
- Vasconcelos, Carolina Michaëlis de, *Cancioneiro da Ajuda, edição crítica e commentada*, 2 vol., Max Niemeyer, Halle, 1904.
- Vasconcelos, Carolina Michaëlis de, *Glossario do cancioneiro da Ajuda*, Livraria Clássica Editora, Lisboa, 1922.
- Videira Lopes, Graça, *Cantigas medievais galego-portuguesas : Corpus integral profano*, 2 vol., Biblioteca Nacional de Portugal, Lisboa, 2016.

#### 付記

筆者は2020年に春風社から『小鳥が歌う — 古いポルトガル語による聖母マリアの詩』と題した書籍を刊行した。これはカンシオネイロからいくつかの作品を選んで邦訳と解説を試みた一般書である。本稿の記述と重なるところもあるが、本稿は考察対象とした個々の作品について原文ならびに写本校異を掲載し、文献書誌に関する注記を付して学術論文としてまとめたものである。

Fé e belas letras da Santa Maria nas cantigas medievais gelego-portuguesas, II  
As cantigas para louvar a Nossa Senhora

KIKUCHI Noritaka

**resumo**

Este trabalho enseja uma exploração sobre a fé medieval na Nossa Senhora ao lado oeste da península Ibérica, na região atualmente dividido em Galícia da Espanha e Portugal, lendo algumas das cantigas seculares pela língua galego-portuguesa que eram compostas durante os quase cem cinquenta anos, desde o fim do século XII até ao meados do século XIV. Para tanto temos a configuração seguinte.

Capítulo I. Arte de trovadores : 1. A linguagem da poesia rímica ; 2. Diversidade dos géneros ; 3. Os manuscritos e a música dos Cancioneiros.

II. As cantigas do murmurinho dos namorados : 1. «Pelo souto de Crexente» do João Airas de Santiago ; 2. «A rem do mundo que melhor queria» do Paio Soares de Taveiros ; 3. «De mia senhor direi-vos que mi avém» do Rui Queimado ; 4. «Bailade hoje, ai filha, que prazer vejades» do Airas Nunes.

III. As cantigas da tristeza do amor : 1. «Disse-m' a mi meu amigo» do Fernão Rodrigues de Calheiros ; 2. «Assanhei-me-vos, amigo, n' outro dia» do Pero da Ver ; 3. «A Santa Maria fez ir meu amigo» do mesmo ; 4. «Amiga, bem sei do meu amigo» do Sancho Sanches ; 5. «Vistes vós, amiga, meu amigo» do João Vasques de Talaveira ; 6. «Meus amigos, que sabor haveria» do João Soares Coelho.

IV. As cantigas da aflição da viagem : 1. «Ir quer' hoj' eu, fremosa de coraçom» do Afonso Lopes de Baião ; 2. «Disserom-mi ãas novas de que m' é mui gram bem» do mesmo ; 3. «Quer' ir a Santa Maria» do Airas Pais ; 4. «Por vee' lo namorado» do mesmo ; 5. «D' ir a Santa Maria do Lag' hei gram sabor» do Fernão do Lago.

V. As cantigas para louvar a Santa Maria : 1. «Senhor fremosa, mais de quantas som» do Afonso Mendes de Besteiros ; 2. «Ai senhor fremosa, por Deus» do Dinis I ; 3. «Quer' eu em maneira de proençal» do mesmo ; 4. «Senhor, em tam grave dia» do mesmo ; 5. «Nostro Senhor Deus, que prol vos tem ora» do Pero da Ponte.

VI. A fé medievais portuguesa na Nossa Senhora, 1. As cantigas seculares, 2. As cantigas religiosas.

**palabras clave** : cantiga, galego-português, fé na Santa Maria, belas letras européias medievais

---

原稿受領2020年10月9日